

『タズキラ・イ・ホージャガーン』の諸写本にみえる相違 —— 書名と系譜について ——

澤 田 稔

はじめに

中央アジア東部（東トルキスタン）のムスリム住民が書き残した歴史叙述の作品のうち、『タズキラ・イ・ホージャガーン』の題名で広く知られているテュルク語の著作は、当該地域において「タズキラ」と題されるムスリム聖者伝のジャンルに入るものの、濱田正美氏の表現を借りれば、「全くの空想の産物としての聖者伝」ではなく「神秘主義的世界観に基づく事件史としての聖者伝」「歴史書的聖者伝」であると性格付けできる〔濱田 2006 : 10-11〕。『タズキラ・イ・ホージャガーン』の「事件史」として捉えることのできる記事の対象時期が16世紀後半から18世紀半ばであることにより、その歴史資料としての価値は二つの点において極めて高くなっている。その第一点は、当該時期、とりわけ中央アジア東部がジュンガル王国の支配下に入った1680年前後から清朝軍によって征服された1750年代にいたる時期に関して、他の歴史資料が乏しいことである。第二点は、当該時期に著された歴史叙述の作品である『シャー・マフムードの歴史』（ペルシア語）や佚名著者の『カシュガル史』（テュルク語）¹⁾の主眼が、チンギス裔のモグール・ハーン家の歴史を語ることであるのに対し、『タズキラ・イ・ホージャガーン』はモグール・ハーン家と協力し、あるいは敵対したムスリム神秘主義者の家系（所謂カシュガル・ホージャ家）の歴史を聖者伝として記していることである。すなわち、16世紀以降の中央アジア東部のオアシス地域における二大支配グループであるモグール・ハーン家とカシュガル・ホージャ家の相互関係の歴史について『タズキラ・イ・ホージャガーン』の記事から多くの事柄が判明するのである。

筆者は先に『タズキラ・イ・ホージャガーン』の諸写本は3グループに分類できるのではないかという仮説を立て、カシュガル・ホージャ家の代表的な人物であるホージャ・アフアークに関する章において叙述内容が3グループ間でどのように相違するのかを検討した〔Sawada 2010〕。本稿は、本書の正式な書名とカシュガル・ホージャ家の系譜に関する記述について写本間の相違を検討し、写本の系統整理に資することを目的としている。本稿も前

1) 『シャー・マフムードの歴史』と『カシュガル史』の叙述内容に関して、澤田稔 2008 : 25-35 を参照していただきたい。

稿と同様に『タズキラ・イ・ホージャガーン』の諸写本を以下のように A, B, C の 3 グループに分けて検討するけれども、実質的には、B グループと A・C グループという二者間の相違が問題となる。

A グループの写本

Bodleian, Turk. d. 20

Bodleian, Ind. Inst. Turk 10

Lund University Library, Jarring Collection, Prov. 313

Staatsbibliothek Preussischer Kulturbesitz, Orientabteilung, Ms. Or. 4-1313 [Hartmann Ms. 122]

Sankt-Peterburgskii filial Instituta Vostokovedeniya Rossiickoi Akademii nauk²⁾, B776

Sankt-Peterburgskii filial Instituta Vostokovedeniya Rossiickoi Akademii nauk, C582

Sankt-Peterburgskii filial Instituta Vostokovedeniya Rossiickoi Akademii nauk, C583

Sankt-Peterburgskii filial Instituta Vostokovedeniya Rossiickoi Akademii nauk, D127

Sankt-Peterburgskii filial Instituta Vostokovedeniya Rossiickoi Akademii nauk, D191

B グループの写本

Institut de France, ms. 3357

British Library, Or. 5338

British Library, Or. 9660

British Library, Or. 9662

Sankt-Peterburgskii filial Instituta Vostokovedeniya Rossiickoi Akademii nauk, B770

Sankt-Peterburgskii filial Instituta Vostokovedeniya Rossiickoi Akademii nauk, D126

C グループの写本

Bodleian, Ind. Inst. Turk 3

Staatsbibliothek Preussischer Kulturbesitz, Orientabteilung, Ms. or. fol. 3292 [Hartmann Ms. 40]

2) ロシア科学アカデミー東洋学研究所サンクトペテルブルグ支所は、2007年6月19日、モスクワの研究所から分離し、ロシア科学アカデミー東洋写本研究所 (Institut vostochnykh pukopisei Rossiickoi Akademii nauk) という独立の研究所となった [高田 2012 : 142]。本稿では便宜上、旧称のままとしている。

I 序文にみえる作品名

Bグループの写本の序文において³⁾、神に対する賛辞と預言者ムハンマドの賞賛に続けて、「それから世界の賢明で完全なる者たちの真つすぐな心に、小生すなわちムハンマド・サーディク・カシュガリーは次のように申し上げる⁴⁾」という書き出しで本書作成の経緯が語られている。「小生」すなわち著者はまず、ミールザー・ハディー・ベグリク (Mirzā Hadī Beglik) の息子でカシュガルのハーキム (民政長官) であったウスマーン・ベグリク (‘Uṣmān Beglik) の同地における公正な統治を賞揚し、その母ラヒーマ・アガチャリク (Raḥīma Agačaliq) の憐憫の情を褒めそやす。そして、彼らの先祖たちが、ナクシュバンディー教団の著名な指導者マフドゥーミ・アーザムの子であるホージャ・イスハークの子孫に帰依してきたことを次のように語る。

この方たちの先祖はホージャ・イスハーク・ワリー猯下〈彼の上に慈悲あれ〉の子孫に改倭し献身してきたらしい。その間、霊知者たちの枢軸、預言者たちの相続人、すなわちホージャ・ジャハーン・ホージャム猯下をはじめとするアズィーズ (尊師) たちが過ぎさっている。特に、ユースフ・ホージャム・パーディシャー猯下は、このアズィーズたちに起きた驚くべき事態や見知らぬ困難さを語り、過去の事柄を聞きあつて、このアズィーズたちから自分自身になされた恩恵を想起し、高貴なる諸靈魂のためにクルアーンを読ませていた。いつも次のように言っていた。すなわち、誰かある者がこのアズィーズたちの特性を描写して彼らに生じた出来事を書く大志をもつならば、と述べていた。小生の悩み多き心にも、このアズィーズたちの出来事を一つの伝記にすればという思いがよぎっていた。〔しかし小生〕自身では容易ではなかった。結局、〔ユースフ・ホージャム・パーディシャー猯下は〕小生に恩恵を開始し、次のように話しかけた。すなわち、「そなたがこの仕事を成し遂げるならば、世界の表面に一つの記念物が残り、我らにもそなたにも共に記念物が必ず残るであろう」と命じた。

この貧しき愚生は仕方なく神託を求め、良きお告げを得て、アズィーザーン (尊師たち)・ホージャガーン (ホージャたち) の諸靈魂に助けを求めて〔著述することに〕踏み込んだ。そしてまた、この『タズキラ・イ・ホージャガーン (ホージャたちの伝記)』

3) ms. 3357, fol. 1b-6b; Or. 5338, fol. 2a-3b; Or. 9660, fol. 1a-3b; Or. 9662, fol. 2b-6b; B770, fol. 3b-4a; D126, fol. 1b-4a. なお、写本のアラビア文字をローマ字に翻字する際、アラビア語・ペルシア語起源の単語における正書法上の軽微な書き誤り (たとえば短母音にもかかわらず長母音表記されている場合) は注記せずに修正する。また、テュルク語の単語も含め写本間の軽微な表現上の相違 (たとえば接続詞 wa/vā や複数語尾-lar/lār の有無) も注記しない。

4) ba’dahu jahān ‘ākil u kāmīllārīning zīhn-i mustaqīmīlārīga bu faqīr al-aḥqar ya’nī Muḥammad Ṣādiq Kāšqarī ‘arḍ yetkūrā dur ki (ms. 3357, fol. 3b). 他の写本ではいくらか表現の違いがある。すなわち、bu faqīr al-ḥaqīr (Or. 5338, fol. 2b), bu faqr wa al-aḥqar (Or. 9660, fol. 2a). Or. 9662, fol. 4a では、「小生すなわちムッラー・サーディク・カシュガリー」(bu faqīr al-ḥaqīr ya’nī Mullā Ṣādiq Kāšqarī) となっている。

のなかに誤謬があったならば、赦しのペンナイフを寛容の手に取って誤りの面を削除し、「神は善行者の報酬を無にしたもうことはない⁵⁾」〔『クルアーン』9-120〕の気高き証明に「誤謬を正した者たちが」入ることを願う。もし至高の神が望まれるならば。「神は、偉大なみ恵みの所有者であらせられる⁶⁾」〔『クルアーン』57-29〕。

さて、本書『タズキラ・アルジャハーン』が著されたのは暦年に1182⁷⁾であったということが、隠されませんように。神は最も正しく知りたもう。

Bularning ābā wa ajdādları Ḥaḍrat-i Ḥōja Ishāq Walī, ‘alayhi l-rahmatu, ning awlādlarīga inābat qīlip vā ihlās qīlip kelgān ekānlār. Har bār qutb al-‘arīfin wārīṣ al-anbiyā’ wa al-mursalīn ya’nī Ḥaḍrat-i Ḥōja Jahān Ḥōjam bašliḡin ‘azizlar ötüp durlar. Ḥuṣūṣan Ḥaḍrat-i Yūsuf Ḥōjam Pādišāh bu ‘azizlarga kelgān ḥālāt-i ‘ajībalar vā muṣkilāt-i ḡarībalar nī ḥikāya qīlip, vā sar-guzašt-i aḥwālīn anḡlaṣīp, bu ‘azizlardin özlārigā bolgān iltifātarnī yādlanīp, arwāḥ-i ṣarīflārigā tilāwat-i Qur’ān qīldurur erdilār. Har bār aytur edilār ki bir kimārsā himmat qīlgay ki bu ‘azizlarning awṣāflarīnī bayān āylāp, olargā kelgān wāqī’alarnī kitābat qīlsa dep zīkr qīlur edilār. Bu faqīr al-aḡqarnīng ham ḥāṭir-i ṣikāstimda kečār erdi kim bu ‘azizlarning wāqī’alarnī bir tazkira qīlsam dep. Özlükdin muyassar bolmas erdi. Āḥir bu kaminagā iltifāt āḡāz āylāp ḥitāb qīldilar ki bu iṣnīng ‘uhdasidin siz čiqsangīz ki jahān ṣafḥasidā bir yād-gār bāqī qalsa, vā ham bizning ham sizning birlā yād-gār bāqī qalgūsi dur dep ḥukm āylādīlār.

Bu banda-i bī-sar-u-sāmān nāčār istiḥāralar qīlip, istiḥārada biṣāratlar tapīp, vā arwāḥ-i ‘azizān ḥōjagāndin istimdād tilāp qadam qoydum. Vā yana umīd ol ki bu Tazkira-i ḥōjagān icrā har sahw ḥaṭāyī wāqī’ bolgān bolsa, qalam-tarāš-i ‘afwīnī karam iligīgā alīp, ṣūrat-i ḥaṭānī maḥw tarāš āylāp, inna ‘llāha lā yuḍī’u ajra l-muḥsinīna ning mā-sadaq-i ‘aliyada dāḥil bolḡaylar. In šā’a ‘llāhu ta’ālā. Wa ‘llāhu zū l-faḍli l-‘azīmi.

Ammā maḥfī qalmaḡay kim ta’riḥqa ming yūz seksān iki erdi kim bu kitāb Tazkirat al-Jahān taṣnīf taftī. Wa ‘llāhu a’lam bi ‘š-ṣawābi.

(ms. 3357, fol. 5b-6b. Cf. Or. 5338, fol. 3a-b; Or. 9660, fol. 3a-b; Or. 9662, fol. 5b-6b; D126, pp. 6-7=fol. 3b-4a⁸⁾; B770, fol. 3b-4a.)

5) 訳文は藤本（編）1970：211に拠る。

6) 藤本（編）1970：494に拠る。

7) Or. 9662, fol. 6bでは「1192」（ming yūz toqsan iki）、B770, fol. 4aでは「1251」（ming iki yūz ellik bir）となっている。この2つの紀年に関しては、本文内で後述する。

8) ヨーロッパ紙に書かれたD126写本はアラビア文字による頁番号と算用数字による葉番号が併記されている。前者は書写人（サントペテルブルグ大学東洋学部教員 Mulla Khusain Feizkhanov）、後者は近現代の研究者によるものであろう。Muginov 1962：75-76；Dmitrieva & S. Muratov 1975：65はヨーロッパ紙と書写人の名前に言及している。

以上で序文は終わるが、本書作成の経緯を記すこの序文によると、ムハンマド・サーディク・カシュガリーはホージャ・イスハーク・ワリーの子孫ユースフ・ホージャムの命令に従い、ホージャ・ジャハーンをはじめとする尊師たちの出来事を伝記にまとめる決意をしたことが分かる。なお、ユースフ・ホージャムとホージャ・ジャハーンはホージャ・イスハーク・ワリーの曾孫ホージャ・ダーニヤールの長男と三男（または次男）にあたり、1745年から1750年代なかばにかけて活躍した人物として本書において詳しく描かれている。

次いでこの序文には、著者ムハンマド・サーディク・カシュガリーの弁明のごとき言葉のなかに『タズキラ・イ・ホージャガーン（ホージャたちの伝記）』という表現が出てくる。ここでは通説に従って書名として翻訳しておくが、後段で書名『タズキラ・アルジャハーン』と著作年（1182年）を明示する簡潔な文章により序文が結ばれていることからすれば、この『タズキラ・イ・ホージャガーン』は「ホージャたちの伝記」という意味の普通名詞である可能性も高い。すでに濱田正美氏は、この序文の『タズキラ・イ・ホージャガーン』は作品の題名ではなく、単に「ホージャたちの伝記」を意味するにすぎないとし、本当の作品名は『タズキラ・アルジャハーン』（または、そのペルシア語形の『タズキラ・イ・ジャハーン』）であると断じている [Hamada 1978: 90, footnote 48]。濱田氏の断定はBグループ写本の序文に基づく結論として、ひとまず首肯されるけれども、他のグループの写本の序文との違いに触れていない。この点も含めて、作品名と著作年に関しAグループとCグループの写本を検討する必要がある。

Aグループ写本の序文⁹⁾とCグループ写本の序文¹⁰⁾には修辭的な言辭が多く、Bグループ写本の序文にない、詩や『クルアーン』の章句の引用も見られるけれども、序文の全体構成と内容の骨子はBグループ写本と同じである。しかし、上に訳したBグループ写本序文の第2段落以下に相当する部分に注目すべき相違点が見られるので、その部分を以下に訳出する。

そして、この貧しき愚生は自らの良心に鑑みて、この重大な命令に対し〔成し遂げる〕能力や才能が自分にあるとは思えず、また指示・懇願にも背けず、仕方なく神託を求め、そこに示唆を得て、アズィーザーン（尊師たち）やホージャガーン（ホージャたち）の靈魂に援助を求めて〔著述することに〕踏み込んだ。そして、服従のベルトを勇氣の腰に締めて、〈神の言いつけをよく守れ。また、この使徒、ならびにおまえたちの中で権力ある人の言いつけを守れ¹¹⁾〉〔『クルアーン』4-59〕という内容に〔従って〕

9) Turk d. 20, fol. 1b-5b; Ind. Inst. Turk 10, fol. 1a-2b, 3b; Prov. 313, fol. 4a-8b; Ms. Or. 4-1313, pp. 1-14; B776, fol. 1b-8b; C582, fol. 4b-6b; C583, fol. 1b-9b; D127, fol. 1b-6a; D191, fol. 1b-7a. Ind. Inst. Turk 10 写本は fol. 1a の前および fol. 2b と fol. 3b の間に紙葉の欠落があるようで、序文の最初と中途が欠けている。Ms. Or. 4-1313 も欠葉があり、序文の最初がない。

10) Ms. or. fol. 3292, pp. 1-8; Ms. Ind. Inst. Turk3, fol. 3b-6b.

11) 藤本（編）1970: 121 に拠る。

実践し、目標に向かい始めた。明敏な学者や才能ある賢者や熟練者たちへの強い願いと誠実な望みは以下のとおりである。この『タズキラ・イ・アズイーザーン（尊師たちの伝記）』のなかに誤謬があったならば、理解が容易であるように、その言葉の配列において、あるいは書き方において、あるいは物語の引用において、容赦のペンナイフを寛容の手に取って誤りの所を削除し、報酬の言葉を確証して浅学の小生を良き祈願により思い出すならば、おそらく、神のもとで〔小生は〕朽ち果てないであろう。〈神は善行者の報酬を無にしたもうことはない〉〔『クルアーン』9-120〕の気高き証明に彼らが入ることを望む。〈神は、偉大なみ恵みの所有者であらせられる〉〔『クルアーン』57-29〕。

Vā bu banda-i bī-barg sāmān ōz wijdānīga qarap, bu amr-i 'azīmga jibillatīda qābilyat wa isti'dād kōrmāy, vā ḥukm iltimāsga taḥī taḥalluf kōrgūz almay, nāčār istiḥāralar qīlip, [istiḥārada] imā wa iṣāratlar tafīp, vā arwāḥ-i 'azizān wa ḥwājagāndin istimdād wa isti'ānat tilāp qadam qoydī. Vā inqiyād kamarīni jur'at beligā baḡlap, aṭiy'ū 'llāha wa aṭiy'ū 'r-rasūla wa ūlī 'l-amri minkum, maḍmūnīga 'amal qīlip, maqṣad ṭarafīgā šurū' qīldī. Dānišmandān-i šāḥib-nazar vā hūšmandān-i arbāb-i faḍl vā hunarvarlardin umīd-i wāšiq vā niyāt-i šādiq ki bu Taḡkira-i 'azizān ičrā har sahw ḥaṭāyī ki wāqī' bolḡan bolsa, suhūlat-i fahm birlā yā tartīb-i kalāmīda [yā kitābatda] yā naql-i riwāyatīda qalam-tarāš-i 'afwnī karam iligīgā alīp, šūrat-i ḥaṭānī maḥw wa tarāš āylāp, qawl-i ṣawābnī iṣlāḥ āylāp, bu faqīr-i kam-māyanī du'ā-yi ḥayr birlā yād āylāsālār, šayad ki 'inda 'llāhi dāyī' ketmāgāy. Umīd bar ki inna 'llāha lā yuḍī'u ajra 'l-muḥsinīna ning mā-šadaq-i 'aliyāga dāḥil bolḡaylar. Wa 'llāhu zū 'l-faḍli 'l-'azīmi.

(Turk d. 20, fol. 5a-b. Cf. Ind. Inst. Turk 10, fol. 3b; Prov. 313, fol. 8a-b; Ms. Or. 4-1313, pp. 13-14; B776, fol. 8a-b; C582, fol. 6b; C583, fol. 8b-9b; D127, fol. 5b-6a; D191, fol. 6b-7a; Ms. or. fol. 3292, pp. 7-8; Turk3, fol. 6a-b. なお [] 内のローマ字翻字は Turk d. 20 以外の写本に拠る)

この A グループと C グループの写本の序文では、B グループ写本の序文に見える「この『タズキラ・イ・ホージャガーン（ホージャたちの伝記）』のなかに誤謬があったならば」という表現が、「この『タズキラ・イ・アズイーザーン（尊師たちの伝記）』のなかに誤謬があったならば」となっている。1962年にムギノフ (A. M. Muginov) により公刊された、レニングラード (サンクトペテルブルグ) のアジア諸民族研究所 (東洋学研究所) 所蔵写本の目録が、B グループの2写本 B770, D126 を『タズキラ・イ・ホージャガーン』、A グループの5写本 B776, C582, C583, D127, D191 を『タズキラ・イ・アズイーザーン』の作品名のもとに解題するのは [Muginov 1962: 74-76, 85-88], この表現の違いに基づいているのである。当写本目録において『タズキラ・イ・ホージャガーン』は1182 (1768-69) 年に作成された『タズキラ・イ・アズイーザーン』の短縮された異文であると断じられているが [Muginov 1962: 75], 後述するように、著作年を含めて、その断定を再検討する必要がある

る。その後1975年にドミトリエヴァ(L. V. Dmitrieva)とムラトフ(S. N. Muratov)により公刊された同研究所所蔵写本の目録では、両作品名の区別はなくなり、上記のA・B両グループの7写本はすべて『タズキラ・イ・アズイーザーン』の書名で記載され、『タズキラ・イ・ホージャガーン』は『タズキラ・イ・アズイーザーン』の短縮版であることと、両者の著作年について考察がなされている[Dmitrieva & Muratov 1975: 51-66]。

先に訳出したようにBグループ写本の序文の最末尾には、「さて、本書『タズキラ・アルジャハーン』が著されたのは暦年に1182であったということが、隠されませんように。神は最も正しく知れたもう」という文章がある。しかしながら、A・C両グループ写本の序文に、この文章はない。何故、Bグループ写本の序文の最末尾にのみ書名と著作年が記されているのであろうか。まず、1182年という著作年について考察したい。結論から先に述べると、この著作年は序文の内容に矛盾している。すなわち、本書執筆の依頼者の1人とみなされるウスマーン・ベグリク(またはベグ)は、A・B・Cすべてのグループの写本の序文において同様に「カシュガルの栄誉ある王座における絶対的権限をもつハーキム¹²⁾」と形容されているのであるが、清朝史料によると、ウスマーンのカシュガルのハーキム職就任は父ハディーの没した西暦1778(乾隆43)年のことであり、それ以前には遡らないのである[澤田1991: 11-12]。ただし、イスラーム暦1182年(西暦1768-69年)という著作年は、序文最末尾の同様の表現ではあるものの、Bグループの写本のうちOr. 9662写本では1192年(西暦1778-79年)、B770写本では1251年(西暦1835-36年)となっており¹³⁾、前者の場合、矛盾は解消される。つまり、ハディーの没後すぐに著作がなされたということになる。しかし、1写本だけの紀年である1192年を無批判に受け入れることはできない。後者の1251年はあまりに遅い年次であり、序文で賞揚されているウスマーンの没年(1202年、西暦1788年)から半世紀ほど後のことになり、あらたに別の問題が生じる。

なお、A・C両グループの写本の序文はウスマーンの父を「故ミールザー・ハディー・ベグリク(神が彼の廟と墓を天国と慈悲の光で輝かせるように)¹⁴⁾」と表現し、本書の作成時にハディーがすでに死去していたことを明示している。また、『ターリーヒ・ラシーディー』テュルク語訳附編によると、ウスマーンはカシュガルに13年間ハーキムであり、1202年(西暦1787-88年)に逝去したという[ジャリロフほか(編)2008: 173]。逆算すると、ウスマーンがカシュガルのハーキムになったのは1189年(西暦1775-76年)ということにな

12) Kāšqar taht-i 'izzatīda ḥākim-i muṭlaq al-'inān (ms. 3357, fol. 3b; Turk d. 20, fol. 3a; Ms. or. fol. 3292, p. 3).

13) 先に注記したように、Or. 9662, fol. 6bでは「1192」(ming yüz toqsan iki)、B770, fol. 4aでは「1251」(ming iki yüz ellik bir)。

14) marḥūm Mīrzā Hadī Beglik, nawwara 'lāhu turbatahu wa marqadahū bi-anwāri 'l-jināni wa 'l-ḡufrāni (Turk d. 20, fol. 3b; Ms. or. fol. 3292, p. 4; Cf. Ind. Inst. Turk 10, fol. 2a; Prov. 313, fol. 7a; Ms. Or. 4-1313, p. 5; B776, fol. 4b; C582, fol. 5b; C583, fol. 5a; D127, fol. 3a; D191, fol. 3b; Turk3, fol. 4b).

る。これは清朝史料の記す就任年より2-3年早いのであるが、著作年の1182年（西暦1768-69年）より7年ほど後のことになり、Bグループ写本の序文における矛盾は解消されない。

つまり、1182年は『タズキラ・イ・ホージャガーン』（Bグループ写本）の著作年としてあり得ないのである。まして、この年を『タズキラ・イ・アズイーザーン』（Aグループ写本）の著作年とみなすムギノフの記述 [Muginov 1962: 75, 86] は、強引な解釈であると言わねばならない。そして、1182年が著作年としてあり得ないのであるから、この著作年の矛盾が解消されない限り、『タズキラ・アルジャハーン』を本書の作品名であると見なすことは難しい。では、Bグループ写本の序文末尾にのみ明確に記された1182年著作の書『タズキラ・アルジャハーン』とは何であろうか。また、その文言は何故A・C両グループの写本に書かれていないのであろうか。この疑問に関連して、『タズキラ・アルジャハーン』という書名に含意されたと思われるホージャ・ジャハーンという人物の系譜（血統と道統）について次節で考察したい。その系譜の記載箇所や記載に有無について、Bグループの写本とA・C両グループの写本との間に根本的な差異がみられるのである。

II ホージャ・ジャハーンの系譜

『タズキラ・アルジャハーン』（Tazkirat al-Jahān）は「世界（ジャハーン）の伝記」というほどの字義であるが、「世界（ジャハーン）」が何を意味するのか釈然としない。ムギノフは写本目録の解題においてB770写本の序文（fol. 4a）における表記（TZKRH JHAN）を「世界の歴史」（istoriya mira）と訳し、普通名詞として扱っている [Muginov 1962: 76]。しかしながら、ドミトリエヴァとムラトフの写本目録において同箇所はTazkira-i Jihān（「ジハーンの歴史」）と読まれ、書名と見なされている（ジハーンとジャハーンは発音の方式が違うだけであり、全く同じ単語である）。さらに同目録において、このような名称はホージャ・ジハーンの異名をもつホージャ・ヤークーブとガーズイー・ビク¹⁵⁾に敬意を表するため著作に付けられているに違いないと述べられている [Dmitrieva & Muratov 1975: 65]¹⁶⁾。この書名について当目録はそれ以上の解説をせず、単にこの2人の人物に関する本書の章番号（本目録作成者により付けられた番号）をあげているだけであり、その推測の根拠は示されていない。

ホージャ・ジャハーンの名は、前章で簡単に触れたように、弟のユースフ・ホージャムとともに本書の序文のなかに出てきている。その序文で述べられているように、ユースフ・

15) ガーズイー・ビクはガーズイー・ベグと表記されるべきである。ガーズイー・ベグはヤルカンドのハーキムである（ms. 3357, fol. 102a）。

16) なお、Tazkira-i Jihānという書名がガーズイー・ベグに敬意を表して付けられたという推測には疑問が生じるけれども、本稿ではその問題に触れない。

ホージャムはホージャ・ジャハーンをはじめアズィーズ（尊師）たちの特性と彼らに関わる出来事を書くよう著者ムハンマド・サーディク・カシュガリーに命じたのである。ホージャ・ジャハーンとユースフ・ホージャムは、ナクシュバンディー教団の著名な指導者マフドゥーミ・アーザムの息子ホージャ・イスハーク・ワリーの子孫である。つまり、カシュガル・ホージャ家イスハーク派のホージャたちの伝記を書くことが本書の目的であったと考えられる。そのなかでも特にホージャ・ジャハーンの事績を語る事が本書の眼目であるという事は、次に見るように、この人物の血統や道統に関する本書の記述から推論できる。

Bグループの写本では序文に続けて、「さて、系譜には二つの種類、外形的系譜と精神的系譜があるということを知れ¹⁷⁾」という文言で系譜を記載する章¹⁸⁾が始まる。二種の系譜についての抽象的な説明の後、「外形的系譜、すなわち誰その息子は誰それと関係づけられる系譜¹⁹⁾」が具体的に記される。その外形的系譜は預言者ムハンマドから所謂カシュガル・ホージャ家イスハーク派のホージャ・ヤークーブ（ホージャ・ジャハーンの本名）にいたる直系の血統、代々の親子関係の列挙である²⁰⁾。すなわち、この系譜は預言者ムハンマドの子 (farzand) ファーティマ、その子イマーム・フサイン、その子イマーム・ザイン・アルアービディーンというように、第3代イマーム・フサインから第8代イマーム・アリー・ムーサー〔リダー〕までの十二イマーム派のイマームたちを経て、預言者ムハンマドの血脈がカシュガル・ホージャ家のホージャ・ヤークーブに達したことを示している。そして、この外形的系譜の最後に挙げられるホージャ・ヤークーブについては特に次のように記述されている。

そのかた〔ホージャ・ダーニヤール猊下〕の子はホージャ・ヤークーブ猊下であり、そのラカブ（尊称）はホージャ・ジャハーンであった。ホージャ・ジャハーンと言うことについて老師たちは、「このホージャは世界征服者（ジャハーンギール）となる。この者をホージャ・ジャハーンと呼べ」と命じていた。まさにその理由によりホージャ・ジャハーンと名付けられた。

Olarning farzandlarī Ḥaḍrat-i Ḥōja Ya'qūb, laqablarī Ḥaḍrat-i Ḥōja Jahān edilār. Ḥōja Jahān demākdā pīrlārī bu ḥōja jahāngīr bolur, muni Ḥōja Jahān atanglar dep amr qilip edilār. Šul sababdīn Ḥōja Jahān at qoyuldī.

(ms. 3357, fol. 8a. Cf. Or. 5338, fol. 4b; Or. 9660, fol. 4b; Or. 9662, fol. 8a; B770, fol. 4b; D126, p. 8=fol. 4b)

17) Ammā bilgil kim nisbat iki qism dur, nisbat-i šūrī, nisbat-i ma'nawī (ms. 3357, fol. 6b).

18) ms. 3357, fol. 6b-8a. Cf. Or. 5338, fol. 3b-4b; Or. 9660, fol. 3b-4b; Or. 9662, fol. 6b-8a; B770, fol. 4a-b; D126, pp. 7-8=fol. 4a-b.

19) Nisbat-i šūrī dep andāg nisbatni ayturlar kim fulānīning oġli fulāni dep nisbat yetkūrülür (ms. 3357, fol. 6b).

20) ms. 3357, fol. 7a-8a.

この特別な記述はホージャ・ジャハーンが本書の物語の主人公であることを暗に示しているといえよう。なお、本章はこの記述で終わり、精神的系譜（道統）については章の冒頭で抽象的に説明されているだけで、具体的な人名を挙げる道統はBグループの写本において書かれていない。

他方、AグループとCグループの写本において系譜（血統と道統）の記述は序文のすぐ後には見られず、本文の中でホージャ・ダーニヤールの事績とその逝去を記した後、その長男ホージャ・ジャハーンの特性を賞賛する叙述の過程において系譜が記載されている²¹⁾。その記述は系譜に関する抽象的説明においてBグループの写本よりも詳しく、外形的系譜（血統）のみならず精神的系譜（道統）についても具体的に人名を挙げて記載している点でBグループの写本とは根本的に異なる。

血統に関しては、形式的な相違としてBグループの写本は、例示すると「そのかたの子はイマーム・ザイン・アルアービディーン猯下²²⁾」という表現で血脈を預言者ムハンマドからホージャ・ヤークーブ（ホージャ・ジャハーン）に至るまで下降させていくが、A・C両グループの写本は人名のあとに「……の息子」(bin または ibn) を付して父の名を続けるアラブ式の表現をとって、ホージャ・ヤークーブから預言者ムハンマドまで血脈を遡行させていく。ただし、細部を除いて、それらの系譜で挙げられる人名の相違は見られない²³⁾。

次に、A・C両グループの写本にのみ見られる精神的系譜すなわち道統²⁴⁾について検討する。この系譜は預言者ムハンマドから初代カリフ、アブー・バクルへ、そして、サルマーン・ファールスィーやアブー・ヤズィード・バスターミーらを経由してナクシュバンディー教団の始祖グジュドゥワーニーへ、そして同教団の中興の祖ナクシュバンドへ、さらにティムール朝の都サマルカンドを拠点にして活躍したホージャ・アフラルを経てマフドゥーミ・アーザムとその子孫に到る道統である。カシュガル・ホージャ家の成員が含まれる、マフドゥーミ・アーザム以降の系譜は、以下のとおり、二つの系統に分けて記述されている。

そして、マフドゥーミ・アーザム猯下から、この神の恩寵の河は二つの小支流に分かれた。その一つはムハンマド・イスラーム・ホージャ・ジュイバーリーの心の境に委託され流れた。このかたから、この委託は大イーシャーン猯下ホージャ・ムハンマド・アミンにまかされた。それから、親愛なる兄弟ホージャ・バハー・アッディーンにお

21) 系譜を記載する部分は、Turk d. 20, fol. 40b-45b; Ind. Inst. Turk 10, fol. 34a-39a; Prov. 313, fol. 48a-53a (不完全); Ms. Or. 4-1313, pp. 132-147; B776, fol. 67b-77a; C582, fol. 33a-36b (不完全); C583, fol. 77a-86a; D127, fol. 43a-48a (不完全); D191, fol. 47a-43a (以上、Aグループ写本)、Ms. Or. Fol. 3292, pp. 70-80; Ms. Ind. Inst. Turk. 3, fol. 29a-33a (以上、Cグループ写本)。

22) Olarning farzandlari Haqrat-i Imām Zayn al-Ābidin (ms. 3357, fol. 7a).

23) ただし、Aグループ写本の Ms. Or. 4-1313, p. 133 と D127, fol. 43a-b では、Imām Hasan 'Askarī (十二イマーム派の11代イマーム) から同派のイマームたちを遡っている。

24) Turk d. 20, fol. 41b-45b; Ind. Inst. Turk 10, fol. 35a-39a; Prov. 313, fol. 48b-52b; Ms. Or. 4-1313, pp. 133-147; B776, fol. 69b-76b; C582, fol. 33b-36b (不完全); C583, fol. 79a-85b; D127, fol. 43b-48a; D191, fol. 48b-53a; Ms. Or. Fol. 3292, pp. 73-80; Ms. Ind. Inst. Turk. 3, fol. 30a-33a.

いて高潮した。このかたから、最愛の子、大猊下ホージャ・ハーシム・ダフビーディーに委ねられた。それから、その兄弟〔正しくは従兄弟〕イーシャーン猊下ホージャ・ムハンマド・ユースフにおいて発現した。それから、完全性をもつ親愛なる子、ホージャ・アーファークにおいて現れ、明らかになった。

Vā Ḥaḍrat-i Maḥdūm-i A'zamdīn bu fayḍ-i ilāhī daryāsī iki šāḥča ayrıldī. Biri Muḥammad Islām Ḥwāja Jūybārī dilları sar-ḥaddīga wadī'atan jāri boldī. Bulardīn bu amānat Ḥaḍrat-i Īšān-i Kalān Ḥwāja Muḥammad Amīngā tapšuruldī. Andīn kīn birādar-i arjmand Ḥwāja Bahā' al-Dīnda jūš urdī. Bulardīn farzand-i nūr-i dīda Ḥaḍrat-i Kalān Ḥwāja Hāšim Dahbidīga tapšuruldī. Andīn birādarları Ḥaḍrat-i Īšān Ḥwāja Muḥammad Yūsufda zuhūr körgüzdi. Andīn farzand-i arjmand Ḥwāja Āfāqda zāhir vā numāyān boldī.

(Turk d. 20, fol. 45a-b. Cf. Ind. Inst. Turk 10, fol. 38a-b; Ms. Or. 4-1313, p. 145; B776, fol. 76a; C583, fol. 85a-b; D127, fol. 47b; D191, fol. 52b; Ms. Or. Fol. 3292, p. 79; Ms. Ind. Inst. Turk. 3, fol. 32b-33a)

この記述の最後に現れるホージャ・アーファーク（1693-94年没）は所謂カシュガル・ホージャ家アーファーキーヤ（アーファーク派、アーファーク統）の名祖であり、父ムハンマド・ユースフとともに東トルキスタンでの活動が伝えられている。この家系はアーファークの祖父ムハンマド・アミンの称号である大イーシャーン（イーシャーニ・カラーン）にちなみ、イーシャーニーヤとか、由来は不明ながら、アクタグルク（白山党）とも呼ばれる。ただ、上に訳出した道統の記述は、アーファークが曾祖父マフドゥーミ・アーザムからどのような経路で道統を受け継いだかを示しているのであり、アーファーク以降の世代への受け継ぎが言及されていないことに注意しておきたい。

A・C両グループの写本はアーファーキーヤを主眼とする精神的系譜に続いて、もうひとつの流れをつぎのように記述する。

さて、もう一つの小支流はマフドゥーミ・アーザム猊下からマウラーナー・ルトゥフ・アッラー・チュステイー猊下において信託と委託のやり方により流れた。マウラーナー猊下から、この委託の系譜はイーシャーン猊下ホージャ・イスハーク・ワリーにおいて波打った。そのかたから、最愛の子ホージャ・シャーディー・アズィーズ猊下において象徴を知らしめた。このかたから、愛しい子ホージャ・ウバイド・アッラー猊下において明らかになった。このかたから、太陽のような美貌の最愛の子ホージャ・ダーニヤール猊下において現れた。このかたから、完全性の持ち主たる子で、再会の酒を飲む人、すなわち、ホージャ・ジャハーン猊下ホージャ・ヤークーブ・アズィーズにおいて顕示した。

Ammā yenā bir šāḥčasī Ḥaḍrat-i Maḥdūm-i A'zamdīn Ḥaḍrat-i Mawlānā Luṭf Allāh Čustīda wadī'at vā amānat ṭarīqasī birlā jāri boldī. Ḥaḍrat-i Mawlānādīn bu nisbat-i

amānat Ḥaḍrat-i Īṣān Ḥwāja Ishāq Walida mawj kōrsātti. Olardīn nūr-i dida Ḥaḍrat-i Ḥwāja Šādī 'Azīzda nišan bilgūzdi. Bulardīn farzand-i jigar-band Ḥaḍrat-i Ḥwāja 'Ubayd Allāhda numāyān boldī. Bulardīn farzand-i dil-band āftāb ṭal'at Ḥaḍrat-i Ḥwāja Dāniyālda zuhūr āylādi. Bulardīn farzand-i šāhib-kamāl vā jur'a-nūš-i bāda-i wišāl, a'nī Ḥaḍrat-i Ḥwāja Jahān Ḥwāja Ya'qūb 'Azīzda jilwa kōrsātti.

(Turk d. 20, fol. 45b. Cf. Ind. Inst. Turk 10, fol. 38b; Prov. 313, fol. 52b; Ms. Or. 4-1313, p. 146; B776, fol. 76a-b; C582, fol. 36a-b; C583, fol. 85b; D127, fol. 47b-48a; D191, fol. 52b-53a; Ms. Or. Fol. 3292, p. 79; Ms. Ind. Inst. Turk. 3, fol. 33a)

この系譜はマフドゥーミ・アーザムの子でムハンマド・アミーンの弟であるイスハーク・ワリーからホージャ・ジャハーン（ホージャ・ヤークーブ）までのカシュガル・ホージャ家イスハークヤ（イスハーク派、カラタグルク、黒山党）の道統を示している。なお、マウラーナー・ルトッフ・アッラー・チュステイーはマフドゥーミ・アーザムの高弟であり、もうひとりの高弟で上述のアーファーキーヤの系譜に登場しているムハンマド・イスラーム・ホージャ・ジュイバーリーと対立したことが知られている²⁵⁾。

この記述の最後に挙げられているホージャ・ジャハーン猊下は、直後の段落において「時のクトゥブ（枢軸）²⁶⁾」と形容されており、A・C両グループの写本における外形的系譜と精神的系譜の全体的記述はその段で終わるのであるから、両系譜を記載することの主眼がホージャ・ジャハーン猊下の称揚に置かれていることは明白である。

おわりに

検討してきたように、『タズキラ・イ・ホージャガーン』や『タズキラ・イ・アズィーザーン』などの題名で知られている本聖者伝は、序文の内容と系譜の記載の上でBグループの写本とA・C両グループの写本との間に無視できない相違がある。すなわち、

- (1) Bグループの写本の序文には「タズキラ・イ・ホージャガーン」、A・C両グループの写本の序文には「タズキラ・イ・アズィーザーン」という作品名とも普通名詞とも見なしうる表現がある。
- (2) Bグループの写本の序文にのみ、「本書『タズキラ・アルジャハーン』が著されたのは暦年に1182であったということが、隠されませんように」という文章がある。ただし、1182年（西暦1768-69年）は、序文でカシュガルのハーキムとして称揚されているウスマーン・ベグリクと同職就任年（西暦1778（乾隆43）年または西暦

25) この対立については、白海提 2010: 50-51 を参照されたい。

26) qutb-i zamān (Turk d. 20, fol. 45b). Cf. Ind. Inst. Turk 10, fol. 38b; Prov. 313, fol. 52b; Ms. Or. 4-1313, p. 146; B776, fol. 76b; C582, fol. 36b; C583, fol. 86; D127, fol. 48a; D191, fol. 53a; Ms. Or. Fol. 3292, p. 80.

1775-76年)より前である。

- (3) Bグループの写本においては、ホージャ・ジャハーンの系譜(ただし具体的には血統のみ)は序文のすぐ後に記載されている。
- (4) A・C両グループの写本においてホージャ・ジャハーンの系譜(血統と道統)は、その父ホージャ・ダーニヤールの事績と逝去を記述した後、つまり、本文の途中で記載されている。
- (5) A・C両グループの写本においてのみ、ホージャ・アーファークの道統が記載されている。

以上のような相違がどのような過程で生じたのかという肝心な問題について、筆者はまだ解答を用意できていない。また、Bグループの写本はAグループの写本の短縮本であるという、サンクトペテルブルグ(レニングラード)の東洋学研究所(アジア諸民族研究所)の所蔵目録における断定についての検討も本稿ではできなかった。ただ、Bグループの写本とA・C両グループの写本に共通する祖本(1182年の『タズキラ・アルジャハーン』)の存在を想定することができるのではないか、その祖本はホージャ・ジャハーンの事績を賞賛する内容であったのではないか、という作業仮説を提示しておきたい。

参考文献

- Dmitrieva, L. V. & S. N. Muratov (1975) *Opisanie tyurkskikh rukopisei Instituta vostokovedeniya*, vol. 2. Moskva: Glavnaya redaktsiya vostochnoi literatury Izdatel'stva "Nauka".
- Hamada, Masami (1978) Islamic Saints and Their Mausoleums. *Acta Asiatica* 34, 79-98.
- Muginov, A. M. (1962) *Opisanie uigurskikh rukopisei Instituta narodov Azii*. Moskva: Izdatel'stvo vostochnoi literatury.
- Sawada, Minoru (2010) Three Groups of *Tadhkira-i khwājagān*: Viewed from the Chapter on Khwāja Āfāq. In: Millward, James A., Yasushi Shinmen and Jun Sugawara (eds.), *Studies on Xinjiang Historical Sources in 17-20th Centuries*. Tokyo: The Toyo Bunko, 9-30.
- 澤田 稔 (1991) 『タズキラ・イ・ホージャガーン』研究についての覚書 『帝塚山学院短期大学研究年報』39, 1-15.
- 澤田 稔 (2008) 東トルキスタンの先行史書との比較 ジャリロフ・アマンベク, 河原弥生, 澤田稔, 新免康, 堀直 (編) 『『ターリーヒ・ラシーディー』テュルク語訳附編の研究』東京: NIHU プログラム「イスラーム地域研究」東京大学拠点, 25-35.
- ジャリロフ・アマンベク, 河原弥生, 澤田稔, 新免康, 堀直 (編) (2008) 『『ターリーヒ・ラシーディー』テュルク語訳附編の研究』東京: NIHU プログラム「イスラーム地域研究」東京大学拠点.
- 高田時雄 (2012) ロシア科学アカデミー東洋写本研究所と『東洋の文献遺産』誌など『東方学』123, 141-147.
- 白海 提 (バフティヤール・イスマーイール) (2010) ホージャ・イスハークの伝記 *Diya' al-*

Qulub —— その構成と執筆意図をめぐって —— 『西南アジア研究』72, 48-64.

濱田正美 (2006) 『東トルキスタン・チャガタイ語聖者伝の研究』京都：京都大学大学院文学研究科.

藤本勝次 (編) (1970) 『世界の名著 15 コーラン』東京：中央公論社.

(富山大学人文学部)